

2025年8月10日 礼拝説教要旨  
 ヨハネによる福音書講解説教48「信仰と不信頼」  
 ホセア2：1～3、ヨハネ8：39～47

「悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている」（44節）ここに「本姓」（イディオス）という言葉があります。この言葉には「自分の」「固有の」という意味があります。その人の所有、持っているもの。そこからギリシア語では「自分の家」とか「自分の故郷」を意味する言葉にもなりました。語弊があるかもしれません、教会では、皆さんある程度自分を作つておられるかもしれません。でも家に帰れば本当の自分が出ます。それが悪いということではなくて、家の自分、あるいは一人の時の自分、そこに本性が表れます。

イエスさまは、この論争の中でユダヤ人たちの本性を引き出しています。ユダヤ人たちは「わたしたちの父はアブラハムです」（39節）と自分たちの父祖アブラハムを出してきます。ユダヤ人は自分たちがアブラハム、イサク、ヤコブの系譜の中にあることを誇りにしていました。しかし、それは言わば外面、体裁であって、肝心な本性の部分はなかなか見えてきません。それでイエスさまが言われるのです。アブラハムの子なら、アブラハムと同じであるはずだ。けれどもあなたがたはわたしを殺そうとしている。本当にアブラハムの子なのか。それよりも「あなたたちは、自分の父と同じ業をしている」（41節）ここでの「父」はアブラハムではなく肉親の父親のことです。イエスさまは、あなたがたの行動からすると、あなたがたの父はアブラハムではない、別の父親から生まれたのではないかとおっしゃったのです。

すると、ユダヤ人たちは「わたしたちは姦淫によって生まれたのではない」と反論します。別の父親ということで「姦淫」を連想したのでしょうか。そして「わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です」（41節）と言い返します。これは自分たちこそ神の子であるという主張です。ユダヤ人たちは自分たちが神の子であるという自己理解がありました。旧約聖書の申命記第32章にあります「モーセの歌」と呼ばれるところには、イスラエルの民に対して神さまが「神の子らの数に従い国々の境を設けられた」（32：8）また「御自分の息子、娘」（32：19）という表現もあります。

けれども、この主張に対してもイエスさまは反論されます。もしもあなたがたの父が神さまであり、あなたがたが神の子であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずだ。イエスさまは神さまのところから来られた正真正銘の神さまの子です。それなら神さまの子同士、兄弟としてイエスさまを愛することができるだろう。ところが実際はそうではないのです。愛するどころか殺そうとしている。それでは神の子とは言えない。では誰の子なのか。イエスさまはここで決定的なことを言われます。「あなたたちは、悪魔である父から出た者であって」（44節）これは大変厳しい言葉です。ある人は、このイエスさまの批判は苛烈だと言います。確かにそうです。神の子と悪魔の子では天の地の違いがあります。

しかし、わたしたちは、自分たちがそれほどまでに転落したことを知らなければなりません。申命記の「モーセの歌」では、イスラエルに対して「息子、娘」と呼ぶ一方で「彼らは逆らう世代、眞実のない子らだ。彼らは神ならぬものをもって、わたしのねたみを引き起こし、むなしものをもって、わたしの怒りを燃え立たせた」（32：20～21）とあります。この背景にはやはりイスラエルの民が金の子牛を作つて拝んだ偶像礼拝の罪があるでしょう。神さまが

せつかくエジプトから彼らを救い出されたにもかかわらず、平気で神さまを捨てて、物言わぬ偶像を神にしてしまう。それに対して当然神さまはお怒りになられます。その原因は他でもないわたしたちです。わたしたちが神さまの子であることを捨てた。神さまを父とするのではなく、悪魔を父としたからです。

「悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない・・・悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである」(44節) ここでは二つのことが言われます。一つは「人殺し」もう一つは「偽り」です。これは悪魔の子であることの結果です。創世記の物語でも、蛇は「死ぬことはない、神のようになれる」と言って誘惑します。でもそうではなかった。それは偽りでした。「塵にすぎないお前は塵に返る」(3:19) アダムとエバは死の宣告を受け、神になるどころか楽園を追放され、死に向かって突き進む人生になってしまいました。またその子どもたち、カインとアベルにいたっては兄弟殺しが起こる。「人殺し」です。その後の人類もこの偽りと人殺しにまみれた歴史を歩み続けることになりました。

この8月は戦後80年ということで改めて戦争のことを考えさせられております。先週は原爆の日を迎えたからやはり原爆の悲惨さ、傷の深さを強く思われました。でも同時に日本がアジアの国々に対して何をしたかということを忘れてはいけません。当時の日本は軍を中心とする指導者らによって太平洋戦争に突き進んでいきました。資源のない日本が燃料確保のため、大東亜共栄圏という美名のもとに、アジアの国々に侵略していきました。そこで行われたことは暴力、殺戮、搾取でした。やがて日本は戦争に負け、多大な犠牲だけが残りました。何のために多くの若者たちが戦場に駆り出されて行ったのでしょうか。そこにあるのはまさに「偽り」と「人殺し」ではないでしょうか。

そしてその悲惨は今日も繰り返されています。あのガザの現状を見るときに、ここまで人間は残虐になれるものなのかなと思います。すべてを破壊し尽くしていく。それが神の子のすることでしょうか。もちろんそうではない。まさに人間の悪魔性が露出している。悪魔の子なのです。そこに人間の本性があります。しかしこの悪魔の子を神の子に変える救いを神さまは与えられました。それがイエスさまの救いです。イエスさまは十字架によって悪魔の子であったわたしたちをそこから贖い出し、よみがえりによって神の子へと導き入れてくださいます。

わたしたちは洗礼を受けて神の子へと召されました。けれども終末の完成までは、まだその本性と戦い続けなければなりません。神の子か悪魔の子か。信仰か不信仰か。その戦いが常にあります。悪魔が常に頭をもたげてきます。けれども「神に属する者は神の言葉を聞く」(47節)とあります。神さまの言葉を聞き続ける。イエスさまの言葉にとどまるときにわたしたちには希望があります。そこで悔い改めて、もう一度出直せばいいのです。

天の父よ。悪魔の子でしかなかったこのわたしの本性を神の子として造り直してくださるその恵みを感謝します。そのために尊い神さまの独り子イエスさまの尊い命がささげられました。どうぞ御言葉に聞き続け神の子としての歩みを続けることができますように。主の御名によつて祈ります。アーメン。